

# 滿洲語基礎語彙 II. 衣 篇

## Manchu Basic Words II. Clothing

山 本 謙 吾

Kengo Yamamoto

- 0. Purpose
- 01. List of words : A. Spoken Manchu
- 02. List of words : B. Script Manchu
- 1.-2. Notes on the forms supplementary to the list B above
  - 1. etu- and other forms with related meanings
  - 11. the sememe of the form etu-
  - 111.-112. the contexts
  - 12. nere-
  - 13. hûwaita-; umiyele-
  - 14. asha-
  - 15. sifi-
  - 151. sisi-
  - 2. su- and other forms with related meanings
  - 21.-211. su-
  - 212. hala-
  - 22. hete-
  - 23. multule-, multuje-; etc.

Acknowledgments

0. 本稿の執筆の意図、記述の方法については、既に発表した「人体篇」(註1)において述べたので、これを参照されたい。但し、本紀要の性質上若干の点につき解説をつけ加えることにする。満洲語については、1954年度の本学園紀要に筆者の掲げた「満洲語学小書目」の他に、更に下記を参照されたい。服部四郎・山本謙吾:「満洲語口語の音韻の体系と構造」(「言語研究」第30号, 1956年pp. 1-29.); 山本謙吾:「満洲語」(平凡社「世界大百科事典」27巻, 1958年, p. 277f.)。

本稿に掲げる語彙の調査の準拠となる「基礎語彙調査表」は服部四郎博士によって編まれ、1957年8月に刊行されたものである。

満洲語口語の基礎語彙についての報告には、昭和31・32年度文部省科学研究費(総合研究)による服部四郎博士を代表者とする「日本語の系統を明らかにするための日本語及びその四周の諸言語の言語年代学的研究」の分担研究の一部として、筆者が上掲「基礎語彙調査表」に記載報告済みのものがある。上掲「I. 人体篇」においては、これに更に、昭和29~33年間にうけた文部省科学研究費(各個研究)による研究の成果から一部を加えて報告した。文語については、特定の文献についての共時的的研究が語彙の分野では未だ充分進んでいないので、報告をさしひかえて来たが、上掲「I. 人体篇」では、パースペクティブを得るために示した語彙表の他に、若干の動詞についてはその分布及び意味に関してやや詳しい記述を行った。本稿「衣篇」以下の続篇においても、記述の様式は「人体篇」にならうこととする。

口語は音韻表記するが、喉音音素 /ʔ/ は印刷の便宜上すべてその表記を省略する。

語彙表中の ? は該当する形式が満洲語に存在しないか未発見の(口語の場合は informant がその形式を忘却している場合をも含む)ものであることを示す。

文語の諸形式の意味を問題にする場合に掲げる用例は、特に指示しない場合はすべて *Gin-ping-mei bithe*. (康熙47【1708】年序)からとる。語彙表中では、上掲資料の総索引が(1960年末)現在、全百条中 I—XXVIII までは完了しているので、なるべくその範囲内に見出しうる形式を掲げ、用例をその範囲に見出し得ないものについては、原則として、「御製増訂清文鑑」により一応充当し(これを表ではイタリック体で示す)研究の進展に従ってこれを補うものとする。

本稿では用例の訳語を各例の末尾に附したが、これは全く印刷上の便宜である。

01. 「基礎語彙調査表」の II. 衣の項に記載された見出語に対し、一応空欄に充当しうる満洲語口語の諸形式は以下の通りである(語彙番号, 見出語(それに該当する英語; フランス語) / 満洲語口語 / ≪意味(についての訳又は注記)≫。語彙番号がゴチック体のものは、後に本論でとりあげる語彙。

63. 着物 (clothing, clothes, garment; vêtement) /utuku/; 64. 着る (clothe, dress) /utumə/ ≪一般に(着物, 下着, ズボン, 靴下などの)衣類や靴などをみにつける≫ cf. /ahəsəmə, aqəsəmə/ ≪衣類のうち服飾附属品(帽子, 時計, 刀等)を身につける≫, /niməsuləmə, nimusulumə/

註1. 「満洲語基礎語彙 I. 人体編」(「言語研究」第37号, 1960年, pp. 25-44.)。

≪帯をしめる≫; 65. 脱ぐ (take off) /soomə/ ≪(身につけた衣類を)脱ぐ; (しばったもの, 結んだものを)とく, ほどく≫, cf. /mahələ/ ciamə/ ≪(帽子を)とる(ぬぐ)≫, /maləmə/ ≪(ぱっと, ぐっと)一どきにぬぐ, 荒くたくし上げる≫, /xetəmə/ ≪(端から一折一折)まくる, からげる, たたむ≫, /mulutulumə/ ≪(身体の一部にはめたものを)ぬく≫; 66. はだか (naked, bare; il est nu) /fiaqu/, cf. /nišəxun nišuxun/ ≪はだか(雅語)≫, /fiaqu-omə/ ≪はだかになる≫, /nišəxuləmə/ ≪はだかになる(雅語)≫; 66-1. 帽子 (hat, cap) /mahələ/; 66-2. シャツ (shirt; chemise) /kandasə/, cf. /ciaməci/ ≪/kandasə/の上にかける長い単衣もの≫; 66-3. 腰巻 (pagne) ?; 66-4. ズボン (trousers; pantalon) /faqərə/, cf. /šaləvarə/ ≪羊毛皮が中についているズボン (< russ. шалвары)≫; 66-5. 帯 (belt, girdle) /niməsun, niumusun/; 66-6. 外套 (overcoat, coat or gown; manteau ou toge) /palitoo/ ≪< russ. пальто)≫, cf. /jifəcaa/ ≪裏に狐の毛皮などのついた外衣≫; 66-7. 襟 (collar) /mohərəqə, mohuruqu/; 66-8. 靴 (shoe, boot) /savə/ ≪満洲式の鞋, 所謂シナ靴≫, /guləhaa/ ≪(長)靴≫, cf. /vatinkii/ ≪短靴 (< russ. ботинка, ботинки)≫; 66-9. はだし (bare feet) /betəkəcin, betəkucin, betəxəcin/, cf. /emə betəkəcin fekəširəee/ ≪はだしてかけるな≫, /betəkəcin osoo/ ≪はだしになれ≫, /fiaqu betəxə/ ≪何にもはいてない足≫; 66-10. 布 (cloth, material; tissu) /bosə/; 66-11. 綿 (cotton; coton) /kuvun/ ≪わた≫ cf. /bosə/ ≪綿布≫; 66-12. 麻 (flax or hemp; lin ou chanvre) ?; 66-13. 羊毛 (wool; laine) ?; 66-14. 絹 (silk) sujii/ ≪絹, 絹布≫; 67. 毛皮 (fur) /fenixiŋə soqə ≪(毛のついた)皮≫, cf. /uruxə soqə/ ≪なめし皮≫, /jifəcaa/ ≪裏に毛皮のついた外衣≫; 67-1. 櫛 (comb) /merəxə/; 67-2. 指輪 (ring) /gaijiasə/ ≪cf. シナ. 戒指≫, cf. /seməkən/ ≪腕環≫, /sizə, sisə/ ≪みみわ≫; 67-3. 鋏 (scissors, shears) /hasəhə/; 68. 針 (needle; aiguille) /unu/; 69. 糸 (thread; fil) /toŋə/; 70. 縫う (sew; je couds) /ifimə/

02. 文語では「基礎語彙表」の見出語に対して一応以下の諸形式をひきあてることができる。

63. etuku, etuku adu ≪衣類≫; 64; 65; 66. (beye) niohusun, fulahûn ≪あかはだか, まっばだか≫, cf. niohusule- ≪はだかになる≫; 66-1. mahala cf. dodori ≪皮帽子≫; 66-2. camci, gahari ≪camci より短い単衣の下着≫; juyen ≪綿入れの短かい下着≫; 66-3. habtaha ≪男の≫, hebtehe ≪女の≫; 66-4. fakûri; cf. hûsihan ≪(女性がつける)ひだつきのスカート≫; 66-5. umiyesun, 66-6. dahû ≪毛が外側にでた毛皮の外套≫, jibca ≪裏にも毛皮のついた上衣≫, cf. kurume ≪sijigiyan ≪袍≫の上に更にきるもの≫, nemerku ≪油をぬった雨合羽≫; 66-7. ulhun, monggon hûsikû, cf. monggorokû ≪上にとりつけたえり≫; 66-8. sabu, gûlha; 66-9. niohusun bethe, bethe niohusun; 66-10. boso; 66-11. kubun ≪わた≫, cf. boso ≪綿布≫, yohan ≪まわた≫; 66-12. olo ≪いとあさ≫, kima ≪白麻≫; 66-13. ?; 66-14. suje; 67. furdehe cf. ilgin ≪なめし皮≫; 67-1. ijifun, merhe ≪前者よ

り目の細かい(竹製の)くし; すきぐし»; 67-2. *guifun*, cf. *semken* <腕環>, *ancun* <真珠をはめこんだ耳環>, *suihun* <(男の)耳環>, *muheren* <(耳)環>; 67-3. *hasaha*, *hasaha*; 68. *ulme*, *ulmen* (註2); 69. *tonggo*; 70. *ufi-*, *ifi-*, cf. *semi-* <針に糸を通す>, *sise-* <あら縫する>, *siji-* <糸目細かく縫う>, *use-* <かえし縫する>, *sabsi-* <さし縫する>, *seole-* <刺繍する>。

1. 「着る」(64)に該当する部分が多いのは *etu-* であるが、衣類・服飾附属品を身につけることに関係がある他の *nere-*, *hûwaita-*, *umiyele-*, *asha-*, *sifi-*, *sisi-*, などの動詞と共にその分布をしらべてみる。

11. *etu-* には「身体(各部)に密着するように衣類を、また身体各部にぴったり、すっぽりと附属品・服飾品等をつけたり、はめたりして、それらが臨時的なものではなく、また、身体(各部)と同等と、みなされるようにする」というような意義素を仮定することができよう。なにも身につけてない状態、つまりはだかやはだしは勿論常態ではないが、衣類でも手を通さずにはおったり、或いは衣類の上から更に別の衣類をくくりつけたり、服飾品をぶらりさげたするように臨時的なものともみなされる場合には別の形式があらわれる。以下に例を掲げて更に詳しくみよう。

111. A (be) *etu-*; *eture* A の A の位置に立ち得る名詞にはいろいろなものがあるが、まずそのうちで上の仮定を支持するに足るようなものについてみると:

*ulhi suwe lo -i sijigiyan etufi* <袖のまっすぐな羅の袍を着て> (XX-21b), *sekei sijigiyan etuhebi* <貂皮の袍を着ている> (XV-4a); *sušu bocoi juyen etufi* <紫色の襖をきて> (XXV-9b); *uju de menggun -i sirgei digi*, *šan de aisin kiyalmaha Z-ing-si -i ancun*, *beye de kuwecihe bocoi gahari etuhebi* <頭に銀糸の鬚髻, 耳に金を嵌め込んだ紫英石の耳環 身体にはと色のひとえものをつけている> (XIII-2a); *beye be fulgiyan cusei guwalasun etufi* <身に紅いつむぎの袖なしのひとえものをきて> (XXII-4b); *hûsihan be neifi tuwaci*, *fulgiyan fakûri etuhebi* <裙子をひらいてみると, 紅い褲子をはいている> (XXV-4b); *bethe de suje -i sabu*, *boso -i wase etufi* <足に絹の鞋, 木綿の靴下をはいて> (II-13b), *yamji suhe sabu wase be cimari erde bahafi eture eturakû be hono sarkû kai*, *niyalma be geli boljoci ombio* <夕方ぬいだ鞋や靴下が翌朝早くはけるかはけないかということさえわからないのですよ, 人のことだってやはりどうなるか測り知ることができるものですか> (IX-8a), *nainai dedure de eture sabu hûsitun be*, *bi uhufi gamaki* <奥様がおやすみのときおつけになる鞋や脚帯を, 私がかかるでもって参りましょう> (XXIII-19b); *bethe de fun -i fatan -i sohin galha etuhebi* <足に白底の先のそりかえった長靴をはいている> (XIX-5a); *ice mahala etufi* <新しい帽子を

註2, *ere asihata*, *dule kubun -i dorgi ulmen*, *yali -i dorgi u -i adali be sarkû*. <この若僧が, もともと綿の中の針, 肉の中の刺の如きものであるのをしらない> (XX-28b)  
この形は口語の informant 玉聞精一氏の報告した文語形 *ulmen* と一致する。

かぶって》(IX-7a), *an- i etuku uhuken mahala etufi* 《ふだん着と、軟かい帽子をつけて》(XVIII-3b); *uju de gilmarjara nimenggi gese yacin digi etufi* 《頭につやつやとした油のような黒い鬚髻をつけて》(II-20a), *tuwaci tere hehe beye de gulu etuku, uju de sanggiyan boso di-gi etufi* 《みると彼女は身には無地の着物, 頭には白布の鬚髻をつけて》(VI-5a); *guwanz- eturakû ijire miyamire be banuhûsambi* 《冠をつけず梳り化粧するのをなまけている》(VI-13a); *emufanggin etuhe julergi bai nikan* 《方巾をかぶった南方の漢人》(XX-31b); *uju de sekei dodori, aisin -i man-çi-giyoo gidakû etuhebi* 《頭に貂皮のかぶりもの, 金の満池嬌のひたい飾りものをつけている》(XXI-4a); *yasai dalikû (be) etufi* 《眼蔽をつけて》(IV-7b, VI-15b, XVI-8a); *nicuhei gidakû gidafi aisin -i kiyalmaha suihnn etufi oilo etuhengge sanggiyan lingse -i adasun akû camci* 《真珠のひたい飾りをつけて金で象嵌した耳環をつけて外側に着たものは白綾子のおくみのない襖》(XV-17b), *san de aisin -i suihun etufi* 《耳に金の耳環をつけて》(XXIV-8a); *niyengniyeri elu -igese juwan simhun be tucibuhe, ninggun gulu aisin -i guifun etuhebi* 《春の葱のような10本の指を出した, 6つの金むくの指輪をはめている》(XV-7a); *gala de aisin -i semken etuhebi* 《腕に金の腕環をはめている》(XX-21b); *cocoda jaka de kemuni okto -i bujuha menggun -i muheren be etuhebi* 《一物の根元のあたりについていつも薬で煮た銀の環をはめている》(IV-11b); *geli U-sung be emu jergi zangselafi susai moo forifi, golmin selhen etubufi, loo de horiha* 《また武松を一通り拶子で責めつけてから50棒たたいて長い首かせをはめて, 牢に檻禁した》(X-4a); etc.

上例の如くAの位置に立つ名詞は何れも手を通し, 足を通して身体にぴったりつける *sijigiyan*, *juyen*, *gahari*, *guwalasun*, *jibca*(後出), *fakûri*, *wase*, *hûsitun*, などの如き衣類や *sabu*(註3), *gûlha* の如きはきもの類, *mahala*, *dodori*, *fanggin*, *guwan-z*, *di(-)gi*, *yasai dalikû* の如きかぶりもの類の他に, ひたいにつける飾物である *gidakû*, や *guifun*, *semken*, *suihun*, *ancun* の如き直接指, 腕, 耳たぶ等にはめてつける装飾品の類, を示すものである。 *muheren* は此の場合特別の用途をもつ環であり, *selhen* も特別なものであるが, 上例すべてを通じて何れも直接身体(各部)につけるものを示す点に共通点がみとめられる。衣類の場合も重ねてきて行くのであるから直接身につけるものと同等と考えられる: *Li-ping-el hendume, bi inu boode genefi jai emu etuku nong-gime etuki, dobori aika beikuwen ayoo sefi genere de, Pan-gin-liyan hendume, gege sinde jibca bici emke gajifi minde etubu, bi geli boode genere anggala. Li-ping-el je seme alime gaifi genehe, ……*《李瓶児が申しますには, 「私も部屋に行ってもう一枚着物を重ねて(増して)着ましよう, 夜もしか冷えるといけないから」といって行こうとすると潘金蓮がいい

註3. *sabu* の場合は他に次の如き *idiom* がある。

*sabu tata-* (《lit. 鞋をひっぱる》): *sabu tuheke seme nyalma de nikefi sabu tatame* 《鞋がぬげおちたと人によりかかって鞋をはき》(XXIV-9a), *tura de nikefi sabu tatambi* 《柱によりかかって鞋をはいている》(XVIII-10a)

ますには、「ねえさんあなたのところに毛皮の襖があれば一枚もって来て私に着せて下さい、私も部屋に行くよりも」。李瓶児は「ええ」と承知して行きました》(XXIV-5b), だが後に掲げる如く直接身体に密着しているとみなされない場合や衣類に別の衣類や装飾品がとりつけられているとみなされる場合はこの形式はあらわれない。

112. 次に、一般に衣類を身につけることを示す場合にこの形式があらわれるが、それにもいろいろな段階がある：*ebuhu sabuhû ilifi etuku etufi* ≪あわてて起き上って着物を着て≫(VIII-17a), *ekseme ilifi etuku etufi* ≪いそいで起きて着物を着て≫(XVII-4b); *mini etuku gaji, bi etuki sefi goidahakû etuku halame etufi* ≪「私の着物をもって来い, 着よう」といって程なく着物を着がえて≫(I-34a), *bi kemuni etuku bufi etubumbi* ≪私はいつも着物をやって着させている≫(XIV-19b); *ilifi uju ijifi, dere obofi mahala etuku etuhe* ≪起きて頭髪を梳って, 顔を洗って帽子や着物をつけた≫(XVI-8a), *uju ijifi, mahala, etuku sabu etubufi* ≪頭髪を梳って, 帽子, 着物, 鞋をつけさせて≫(V-15b); *uttu ofi doigonde bucerede eture etuku be belheme araki sembi* ≪こんなわけであらかじめ死ぬときに着る着物を用意してこしらえようと思えます≫(III-9a), *sinahi etufi* ≪喪服を着て≫(VI-6b); *beye de boconggo etu'u etufi* ≪身に色模様のある着物をきて≫(XVI-22b), *gulu etuku etufi* ≪無地の着物をきて≫(VIII-19a, XVI-1b); *beyede fulgiyan etuku etufi* ≪紅い着物をきて≫(XIX-28a), *lo etuku etufi* ≪羅の着物をきて≫(XIII-10b). 他に衣類の材質 或いは色模様を示す形式が *etu-* の目的語の位置に立つ場合もある：*Yang-jiyan daci suje be etume, amtangga be jeme banjimbihe* ≪楊戩はもとから絹物を着, うまいものを食ってくらしていた≫(XVII-10a); *fulgiyan niowang-giyan alha bulha etufi* ≪紅と緑の花模様のあるものを着て≫(XV-4b), *alga bulga etuhe be sabufi* ≪花模様のあるものを着たの をみて≫(XXIV-9); *banitai šumin niowanggiyan micihiyen fulgiyan be eture de amuran* ≪生れつき深緑浅紅を着るのが好き≫(XVIII-15a). 更に, 一般化したものには：*uju be acabume ijifi, beye de kiyab seme etufi* ≪頭髪をよく似合うように梳って, 身にぴったりと着物を着て≫(I-40b), *encu jeme encu etume* ≪ちがったものをたべちがったものを着て≫(XVI-16b), *eture baitalara tetun agûra* ≪着たり使ったりする道具≫(iiia), *ejen ningge be jeme etume banjimbime, geli ejen be ehe seci, i we de akdafi banjimbi* ≪主人のものを食べたり着たりしてくらしていながら, なお主人を悪くいうなら, 彼は誰にたよってくらしているのか≫(XXV-18b), *tere hehe ilifi nure wenjeme genehe. U-sung tuwa ibere sele be jafafi yaha ibere de, tere hehe goidafi emu tampin nure wenjefi emu galai tampin jafafi, emu galai U-sung ni meiren be emgeri fatafi hendume, ecike uttu nekeliyen etuci, beikuwen akûn* ≪彼女は立上って酒をあたために行った。武松は火ばしをもって炭火をかきたてていると, 彼女は程なく一瓶の酒をあたためて片手で瓶をもち, 片手で武松の肩を一度つねって申しますには, 「義弟さんこんなに薄着をしていて寒くはないの?」≫(II-7b),

efu si dule ere gese niyere *nekeliyen etuheni*. beyerakûn serede ≪お兄さんあんたやっぱりこんなに弱い薄物をきていらっしたのね 凍えやしませんか≫ (XXIV-6a)。最後に、*etu-* が単独で一般に衣類を身につけることを示す例を揚げよう：*emu beye eture jetere de amcabure be dahame* ≪一身は衣食に追われるので≫ (I-2b)。

12. *nere-* は「御製増訂清文鑑」：*yaya etuku be ulhi sisirakû tohomirakû meiren fisa de nikebure be, . . .* ≪一般に衣類を袖に手をさしこまず釦をかけずに肩，背に（もたせ）かけるのを，……≫；「清文彙書」：凡衣不扣鈕不穿袖將衣披於肩衣之披；などの如く 清朝時代の諸辞典にも明記されている通り「はおる，肩にひっかける」などに当り，*etu-* とは異なり臨時的な，密着しないつけ方である；*gecuheri etuku, şeolehe juyen, caibi -i jibca, sekei dahû be olhoho giran de nereme* ≪錦欄緞子の着物，刺繍をした襖，豹皮(?)の襖，貂皮のはおりをひからびた屍にはおり≫ (I-5a), *emu giya-ša etuku be nerefi* ≪一枚の袈裟衣をはおって≫ (I-6b), *beyede emu senggi icebuhe juyen etufi emu defe fulgiyan alha nerehebi* ≪身に血染の襖をきて一反の紅い花模様のある緞をはおっている≫(I-35b), *tuwaci, Li-ping-el ujui funiyehe facafi, jibehun nerefi, alimbaharakû joboro arbun -i tehebi. cai omime wajiha manggi, sargan juse sishe sektehe* ≪みると，李瓶児は頭髪をふりみだして，掛ぶとんをはおって，耐えきれないほどくるしい様子で坐っている。茶をのみ終わったら女中が敷ぶとんをしいた≫ (XVII-15b)。

13. *hûwaita-*; *umiyele-*: 衣類の上に更に別の衣類を重ねてくる場合には既に示した如く *etu-* で示しうるが，別の衣類をくくりつけ或いは巻きつけるような場合には別の形式が充当される：*Li-ping-el beye de fulgiyan na sunja boconggo, ulhi šuwe lo -i sijigiyan etufi, fejile sese tabuha šaburu suje hacingga ilhai deisun -i hûsihan hûwaitahabi* ≪李瓶児は身に紅い生地には五つの色どりのある，袖のまっすぐな羅の袍をきて，下には金糸をぬいつけた薄金色の絹物で百花模様の腰ひものついた裙子をつけています≫ (XX-21b), *uthai boode dosifi, emu fulgiyan na niowanggiyan alha -i etuku halame etufi, ilha noho hûsihan hûwaitaha* ≪すぐ部屋に入って，紅い地に緑の花模様の着物に着がえて，全面花模様の裙子をつけました≫ (XXIV-8a), *ainu fulgiyan guwalasun de šušu bocoi hûsihan hûwaitafi halai encu yabumbi. cimari sini nainai de alafi, tede encu emu gûwa bocoi hûsihan bufi acabume etubu se* ≪どうして紅い袖なしうわぎに紫色の裙子をつけて異様な風をしているんだ，明日お前のおくさんに告げて，あの子に(今のとは)ちがった何か別の色の裙子をやってよく似合うように着させなさいといいなさい≫ (XXII-5a), *daci ere hehe juwari erin de kemuni fakûri eturakû, damu juwe hûsihan -i teile hûwaitambi. Si-men-king de ucaraha de hûsihan be neifi uthai ondombihebi* ≪だいたいこの女は夏季にはいつも褲子をはきません，ただ二枚の裙子だけをつけています。西門慶に出くわすと裙子をひらいてすぐみだらなことをやらかしていたのです≫

(XXVI-14a); *dorgi etuku de fulgiyan cusei fakûri etufi, tonggo tabuha tobgiya dalikû be hûwaitahabi* ≪内に着るものには紅いつむぎの褲子をはいて、縁にぬいとりをした膝あてをつけております≫ (XXIII-24b); *niowanggiyan gu -i umiyesun umiyelehebi* ≪緑玉の帯をしめています≫ (XX-21b), *geli umiyelehe umiyesun, beye de etuhe niowanggiyan cuse -i juyen be suhe* ≪またしめた帯、身につけた緑のつむぎの襖をぬいだ≫ (II-5b).

131. 上掲の形式 *hûwaita-* は (*katuri...*) *orhoi futa de hûwaitafi* ≪(蟹を……) 草の縄でしばって≫ (XXI-27a), *boo-giya jifi, ilan nofi be, emu futa de hûwaitafi gamaha* ≪保甲がやって来て三人を一本の縄にくくってつれていった, ≫ (XIX-17b), *nadan nadan dehi uyun fulgiyan tonggo -i emu bade hûwaitafi* ≪7, 7 49本の紅糸でいっしょにしばりつけて≫ (XII-39a), *Sung-hûi-liyan hûsihan be hetefi, Meng-ioi-leo de tuwabure jakade, bethe de yala juwe juru fulgiyan sabu etufi, niownggiyan uše-i fakûri bethe be hûwaitahabi* ≪宋恵蓮は裙子を捲って、孟玉楼にみせますと、足には本当に二組の紅鞋をはいて、緑の紐で褲子の脚をしばりつけています≫ (XXIV-9b), *eleme emu falan songgofi jilakan bethe hûwaitara uše be gaifi besergen de hûwaitafi fasiha* ≪思う存分に一しきりないてからかわいそうなことに纏足をしばる紐をとって寝台にしばりつけてくびを縊りました≫ (XIX-28a), ... *seme emu falan songgofi, emu golmin fungku gaifi booi uce -i horgikû de hûwaitafi fasiha* ≪……と一しきりないてから、一本の長い手拭をとって部屋の戸口の楣にしばりつけてくびを縊りました≫ (XXVI-21b), *U-yuwei-niyang ilhai yafan de emu ceku hûwaitaha bihe* ≪呉月娘は(以前)花園に一台ぶらんこをとりつけておいたことがあった≫ (XXV-1b), *ya ba -i niowanggiyan fodoho moo de mcrin be hûwaitaha ni* ≪どこの緑の柳の木に馬をつないだのかしら≫ (VIII-3b), *Dai-an morin be hûwaitafi dolo dosifi* ≪玳安は馬をつないで中に入って≫ (XVII-14a), などのごとく「*uše, futa, tonggo*, など細長いもので何かを(何かに)しば(りつけ)る, くく(りつけ)る」という意義素が仮定できる形式であるから(註4), *hûsihan* の場合にかぎらず, ひも類でしばってとめる場合には, 次の如くそれをはくには *etu-* の用いられる *fakûri* の場合にも *hûwaita-* が充当された例がみられる: *Si-men-king ni kemuni fakûri hûwaitara be sabufi* ≪西門慶がまだ褲子(の紐)をむすんでいるのをみて≫ (XXII-8a). 又この形式に名詞語幹形成接尾辞 *-kû* の接尾した *hûwaitakû* が身体にくくりつける一種の衣類を示す場合に充当されている: *hefeli hûwaitakû* ≪lit. 腹にくくりつけるもの。はらかけ (cf. シナ語. 兜肚)≫, *tobgiya hûwaitakû* ≪lit. 膝にくくりつけるもの。膝あて (cf. シナ語. 護膝)≫ (VIII-14a). 後者は上掲例中の *tobgiya dalikû* と同じものをさしている (*dali-* ≪さえぎる≫).

14. *asha-* は着用した衣服の上から「服飾品, 或いは(物入れ袋, 包, 貨幣, 刀, 鍵, などの)

註4. cf. 口語 /haitəmə/: /fətavə (širamə) haitəmə/ ≪綱を結ぶ(つなぐ)≫, /šigəlivə haitəmə/ ≪荷物をしぼる≫, /yonəhumə (morimə) haitəmə/ ≪犬(馬)をつなぐ≫。



必要な携行品を腰（ひも）に吊下げるようにとりつける」という意義素が仮定できよう：*hiyan -i fadu be du de asahabi*(sic!)《香袋を腰につけています》(II-20b), *geli hûsihan de ashaha hoto durun -i araha jarin -i fadu be inu buhe* 《更に裙子につけたひょうたん型にこしらえた麝香囊をもやりました》(XII-14a), *beye -i hanci sanggiyan fangse -i gahari etuhebi, uše de hoto durun -i araha junggin -i jarin -i fadu ashahabi*, Si-men-king sabufi, gaju bi tuwaki seme gaifi tuwaci, Pan-gin-liyan -i hûsihan de ashaha jaka ofi, ambula jili banjifi 《身（近）に白絹の下着をつけています，腰紐にひょうたん型にこしらえた錦の麝香囊をつけています，西門慶は目にとめて「もって来い俺がみてみよう」と手にとってみると，潘金蓮の裙子につけたものなので，大変腹をたてて》(XII-16b/17a), *tere hehe uthai ashaha fadu ci ilan duin fun menggun tucibufi* 《彼女はすぐ腰につけた袋から，3,4分の銀をとり出して》(XXIII-19a); *morin -i deleri etuku hetefi ashaha jumanggi dorgi duin sunja yan buya menggun bihengge be gaifi* 《馬上で着物をまくって腰につけた巾着の中に4,5両の小粒の銀があったのをとって》(XIX-8b); *beye de ashaha emu yan -i'emu farsi menggun be gaifi*, Wang-po -i baru hendume, araha eniye taka alime gaisu, cai omiha hûda okini 《身につけた一両の（一塊の）銀をとって，王婆に向って申しますには，「おばさんまあとっていきい，お茶（をのんだ）代にしておきなさい」》(II-30b), *beye de duin sunja yan menggun ashafi, gala de aisin -i fusheku jafafi* 《身に4,5両の銀をつけて，手に金扇をもって》(III-14a), *menggun be yan yan -i beye de ashafi* 《銀を何両も身につけて》(XXII-10a), *holtome Dai-an -i gala ci gaifi damu duin sunja fun -i emu farsi menggun bufi, funcehengge be beyede ashafi genehe* 《だまして玳安の手からとりあげてただ4,5分の（一塊の）銀をやって，残ったものは身につけて行ってしまった》(XXIII-24b), *hehe beye de ashaha hontoho šoge be tucibufi, Ben-sê be nadan jiha sunja fun sacifi dengselafi bu sehe manggi* 《女は身につけた半銀塊を出して，賁四に7銭5分きりとはかって払ってくれといったところ》(XXIII-23a)（註5）; *tede buhe etuku adu, uju -i miyamihan ilha sifikû, menggun jiha be booselame beye de ashafi*《彼女にやった衣類，髪飾りや簪の類，お金はくるんで身につけて》(XXV-7a); *Cenging-ji inenggi dari erde ilime, goidafi dedume, anakû ashafi hogi sei emgi bosika tucike menggun jiha be baicame, bargiyara tucibure arara bodorongge gemu kimcikû ojoro jakada* 《陳經濟は毎日早く起き，おそく床について鍵を腰につけて番頭達と共に入費出費を調べ，収納するのも支払うのも書きつけるのも計算するのもみんな綿密なものですから》(XX-27b); *juwan ninggun se -i hojo niyalma -i beye nimenggi gese niolukan. du de loho ashafi mentuhun haha be wambi* 《16才の美人の身体はあぶらのようにすべすべとしている。腰に刀をおびて愚な男を殺す》(I-1b); *donjici ere aniya teni niyalma de manggašame šuru -i yangselaha buleku be beye ci aljarakû ashambi* 《聞けば今年やと人にはにかみ珊瑚で飾った鏡を身から

註5. cf. 口語 /šogoo/ 《元宝》

はなさず帯びている》(IV-1a); *goidahakû ashaha gu -i jilgan kalang kiling seme guweme<sup>7</sup> jarin -i wa sur seme bahabume, . . . , tere hehe tucinjihe* 《まもなく、腰におびた玉の音がからからとひびき、麝香の香を馥郁とさせて、. . . , 彼女が出て来ました》(VII-11a), *húsihan -i juwe dalbade ashaha gu kalang kiling seme guwembi* 《裙子の両わきにおびた玉がからからとなります》(XX-21b).

15. *sifi-* は「髪飾りの類を頭髮に（挿しこんで）つける」という意義素を仮定できよう：*an -i funiyehe šošohobi, aisin -i araha caise sififi* 《ふだんのままに頭髮を束ねています、金でつくった釵をさして》(XV-17a), *aisin -i caise be uju de ešeme sififi* 《金の釵を頭にななめにさして》(VI-13b), *uju de nicuhe èui -i canggi jalufi, funghûwang caise be haidarame sifihabi* 《頭には真珠や翡翠ばかりをいっぱいにして、鳳凰の釵をかたむけてさしています》(XV-4a); *uju de sifiha aisin -i jalafun sere hergen foloho sifikû* 《頭にさした金で寿という字を彫んだ簪》(XIV-21b); *bi tere be tuwaci, ilha be ešeme sififi, fulgiyan femen de fiyan ijuhakû bime, fiyan ijuha adali* 《私があの人をみると、花をななめにさして、紅い唇には胭脂をぬっていなかったのに、胭脂をぬったようだ》(XIX-6b), *šulu de ešeme sifiha jiyancun-lo ilha niyengniyeri edun de aššame, uju de sisiha doo-liyang-cai sifikû, aisin -i elden šun de jerkišembi* 《鬢にななめにさした剪春羅の花かんざしが春風にうごき、頭にさしこんだ縹涼釵のかんざしは、金の光が日にまばゆい》(XV-7a).

151. 上の最終例にもみえる如く *sisi-* が *sifi-* と同様の位置に殆ど同様の臨時的意味をもってあらわれるが：*šurdeme ajige sifikû be teksin -i cokifi, jurulehe ilha be ešeme sisihabi* 《まわりに小簪をきちんとそろえてさして、一對になった花簪をななめにさしこんである》(II-20a), *Si-men-king ini uju de sisiha aisin -i sifikû be gaifi hehei uju de sisiha manggi* 《西門慶は彼の頭にさした金の簪をとって女の頭にさしこみますと》(IV-6b), *geren hehesi boode etuku halame eturengge inu bi, biyai elden de miyamigan be dasatarangge inu bi, dengjan -i fejile ilha sisirengge inu bi* 《大勢の女達は部屋で着物を着がえているものもある、月光の下に飾りものをなおしているものもある、燈火の下で花簪をさしているものもある》(XXIV-5a), *uju de sisiha sifikû be tatame gaifi tuwaci* 《頭にさした簪をひったくってみますと》(VIII-12a), *faitan be seseme nirufi, ijifun be ešeme sisiha, miyamime dasatame* 《眉を少しばかりえがいて、くしをななめにさした、化粧し身づくろいして》(XX-7a)。しかし、*sisi-* は「(足、手、柄、枝、などの細長い部分のあるものを全体が安定するまでぐっと) さしこむ」という意義素が仮定できる形式であるから *sisi-* の如く髪飾りの場合にのみ現れるわけではない：*aisin -i tamšin de ilha sisihabi* 《金の瓶に花をさしてある》(X-11b), *mei ilha arara bade olgoho gargan be der seme sisihabi* 《(造花の) 梅花をつくるところに枯枝を沢

山さしてある》(XV-7a), *sunja biya duwan-u inenggi oho manggi, yala boo tome duka de suiha -i abdaha sisifi, baba -i uce de ferguwecuke fu bithe latubuhabi* ≪5月端午の日となりましたら, まことに家毎に門に艾の葉をさして, 方々の門に靈驗あらたかなお符をはりつけてあります》(XVI-17b), *tuwaci, umesi beikuwen bime, besergen de buraki jalu toktohobi. uthai ulhi ci juwe da ban-el hiyan be tucibufi, dengjan de dabufi, na de sisiha, na be udu emu fiyeleku yaha dabucibe, kemuni dolo niyeksembi* ≪みると, 大へん寒い上に, 牀にはほこりが一杯つもっています。すぐにたもとから二本の棒状の香を出して, 燈火で火をつけて, 地面にさしこみました, 地面には一台の火鉢に炭火がともってはいるものの, なお身のうちがぞくぞくとします》(XXIII-14b), *teni jai duka de isinaha bici, gûnihakû, Li-ping-el kaltarame tuhere jakade, Pan-gin-liyan uthai gar seme hûlame hendume, ere Li da-jiyei uthai doho -i adali, aššame uthai tuhembî, bi simbe tatambi sehei mini emu bethe nememe nimanggi de sisibufi, sabu de gemu lifahan latuha* ≪やっと次の門についたところ, 思いがけず李瓶児がすべってころびましたので, 潘金蓮はすぐきやっとさげんで申しますには, 「この李大姐はまるでめくらのようね, よたよた動きだすとすぐころぶのね, 私はあなたをひっぱってあげるといってるうちに私の片足は益々雪の中におしこまれて, 鞋には一面に泥がついちやったわ」》(XXI-35a), *gala de mujakû ulin bi, ..., duin forgon -i etuku adu, inu duin sunja pijan bi, gemu gala de sisici ojarahakû tebuhebi* ≪手中には大変な財産がある, …… , 四季の衣類もまた 4, 5 皮箱ある, 全部腕を通すことができず(箱)に入れたままである》(VII-2b), *sinde lobin hutu dayahabio, si amba moro ajige moro de buda sisimbime, ainu mini araha giyose efen be jeke seme toofi umai jabuburakû, sargan jui -i etuku be fulahûn sufi, šusiha jafafi orin gûsin geri tantaha* ≪「お前には餓鬼がとりついているのかい, お前は大椀小椀でめしを(のどに)おしこみながら, 何だって私のこしらえた餃子を食べたんいだい」と罵って一言も返答させずに, むすめの着物を赤裸にはぎとって, 鞭を手にとり, 20, 30 度打ちました》(VIII-4a) (註6).

2. 「脱ぐ」(65) に関して考察すべき形式としては「(結びつけたもの, しめくくったものを) ときはなす, (衣服, 装飾品, などを身体から) とりのける」(註7) という意義素の仮定できる形式 *su-* と衣服をとりのけるのけ方やその範囲などのちがいを示すために充当される他のいくつかの形式とがある。

21. *su-*: *etuku adu sufi* ≪衣類をとって》(IV-3a), *etuku fakûri sufi* ≪着物褲子をぬいで》(XII-13b), *etuku fakûri be fulahûn sufi* ≪着物褲子をすっかり裸にぬいで》(XII-18a), *udunggeri šusihalara jakade, hehe dergi fejergi etuku be sufi, geleme šurgeme nade niya-kûraha* ≪数回鞭打ちますと, 女は上下の着物をぬいで, 恐れ戦いて地べたに脆きました》(XIX-

31b); *sinahi sumbi* ≪喪服をぬぐ≫ (XVI-18a), *hehe aifini sinahi etuku be sufi* ≪女はもうすでに喪服をぬいで≫ (VIII-21a); *Si-men-king...*, *Siyoo-ioi be hūlafi etuku su, bi uthai ere boode dedumbi sehe* ≪西門慶は小玉をよんで「着物を脱がしてくれ、俺はすぐこの部屋で横になるんだ」といった≫ (XIV-26a); *ini etuhe šanggiyan lingse -i sijigiyān be sufi* ≪彼の着ていた白綾子の袍をぬいで≫ (XXIII-15a), *beye de etuhe niowanggiyan cuse -i juyen be suhe* ≪身につけた緑色の袖の襖をぬいだ≫ (II-5b); *Sun-guwa-zui ini beye de hūwaitaha šanggiyan bosoi hūsihan be sufi, juwe tampin emu hontoho tampin nure salibume damtulaha* ≪孫寡嘴は彼の身体に結びつけた白布の裙子をぬいで、二瓶(と)半(瓶)の酒と値ぶみをさせて質に入れました≫ (XII-9a); *jafu mahala sure be* ≪フェルトの帽子をぬぐのを≫ (II-5a), *mahala be sufi* ≪帽子をぬいで≫ (XIII-21a); *besergen de tefi, Pan-gin-liyan be gūlha su serede, Pan-gin-liyan gelhun akū surakū oci ojarahū ofi, goidahakū gūlha sufi besergen de tafaka manggi* ≪牀に坐って、潘金蓮に靴をぬげといいますが、潘金蓮は敢えてぬがないわけにもいかないので、程なく靴をぬいで牀にのぼりましたところ≫ (XII-20a); *giyaban gūlha be sufi* ≪長皮靴をぬいで≫ (II-5b); *yamji suhe sabu* ≪夕方ぬいだ靴≫ (→etu-); *hehei etuhe šeolehe sabu be emke sume gaifi* ≪女がはいていた刺繡をした鞋を片方ぬがしとって≫ (VI-14b); *ekšeme boode dosifi fun fiyan be obofi sifikū suihun be sufi besergen de jibehun dasime deduhe* ≪いそいで部屋に入ってお白粉や胭脂を洗いおとして簪や耳環をのけて牀にかけぶとんをかけて横になりました≫ (XII-26a); *U-sung de etubuhe golmin selhen be*

註6. この最後の例は idiomatic になったもので大食いに対する deprecativ な意味が暗示されている。cf. *sisin, sisingga* ≪大食漢≫

註7. *hūwaita-* と *su-* の中間の過程、即ち「(結びつけられたものが)ゆるむ、ゆるい」ということは、「抱えられていない、定着していない、緊張していない、ゆとりがある」状態を示す *sula* と *o-* ≪なる≫ との連結によって示される: *ere jarin -i fadub, esini boode akū amala, bi tere inenggi Meng-san -jiyei-i emgi ilhai yafan de aika weilere de, mu-hiyang ilha felhn-i fejergi be dulerede, hūwaitahangge sula ofi moo de tafi tuheke bihe, bi aibide baihakū, dule ere aha tunggiyeme baha ni* ≪この香囊は、あなたの御不在後に、私その日孟三姐と一緒に花園で何か仕事をしているときに、木香の花棚の下を通りすぎるときに、結んだのがゆるんで木にひっかかって落ちてしまったんです、(私は)どこにも見当らなかったのですが、やっぱりこやつが拾得していたんですのね≫ (XII-20a). cf. *sinde udu ding be tukiye, cuwan be usara enduri hūsun bihe seme, amala eici giranggi museme sube sula ombi* ≪あなたにたとえ鼎を挙げる、舟を索き動かす神通力があつたとしても、後には或いは骨はまがり筋はゆるくなる≫ (I-6a), *cekudede de ainaha seme injeci ojarahū, ambula injeci urunakū bethe sula ofi tuhembī, ... si elheken oso, mini bet he sula oho* ≪ぶらんこにのるときにはどんなことがあっても笑ってはいけませんよ、大笑をするときと脚(の力)がゆるくなっておっこちますよ、……あなた(押すのを)もっとゆっくりにして、私の脚(の力)がゆるんちやったわ≫ (XXV-3a/4a), *Si-men-king ni ergen uthai šun tuhefi dasame tucike adali teni mujilen sula oho* ≪西門慶の生命は丁度日が落ちてから再び出て来たようなものでやっとう気がゆったりしてきました≫ (XVIII-7b) cf. 口語 /sulavəmə (<sulaa ovəmə)/: /niməsumə sulavəmə; haitəhə fətavə sula-vəmə; ciraa fafumə sulavəmə/ ≪帯をゆるめる; 結んだ綱をゆるめる; 厳重な法規をゆるめる≫。

*subufi*, *halame weihuken selhen etubufi loo de horiha* ≪武松につけさせた長い首かせをとりはずさせて、代りに軽めの首かせをつけさせて牢に檻禁した≫ (X-8b); *donjici niyalma dalbai duka be su seme hūlambi. duka neifi tuwaci dule Li-ping-el hūlhame donjimbihebi* ≪ふときとだれか人がわきの門をあけてと叫んでいます、門を開いてみるとやはり李瓶児がこっそりきいていたのです≫(XXVII-23b).

211. 本文献には、上掲の如き多くの実例の他に、「清文彙書」(乾隆16年【1751】初刻)に人畜墮胎之墮とあり、E.Hauer: *Handwörterbuch*. (1952-1955)に *abgehen* (die Leibesfrucht) とあるような *su-* の例もみられるが、これも胎児を身中に装するものと解するなら、上掲の意義素により統一的に解しうるものである: *Lio-poz juwe sahaliyan muhaliyan okto be gaifi, U-yuwe-niyang ni baru si suiha nure de omi seme werihe, dobori dulin ojoro onggolo, uthai tule genere hunio -i dolo suhe, dengjan dabufi fuhasame tuwaci, emu haha jui bihebi.* ≪(妊婦が階段で足を踏みすべらし、腰をねぢったため腹痛にたえかねて、死産を恐れて、墮胎する条) 劉婆子は二粒の大粒の黒い丸薬をとって、呉月娘に向って、艾酒でのみなさいといって残しました。真夜中になるより前に、すぐにおまるの中に墮りました、燈をともしてつぶさにみると、男の子だったのです≫ (XXXIII-18b), *dobori dulin de isinafi, naranggi taksihakū suhe. hairakan haha jui bihe* ≪夜中に及んで、とうとういちのがつづかず墮りました。おいしいことに男の子でした≫ (XXXIII-19a).

212. *su-* は更に精神面に結びついたものをとりのける場合にも拡張され「(事態を)説明、解説する; (讐, うらみ, 罪, などを)はらす」, などと訳しうる場合にも現れる: *Pan-gin-liyan, U-yuwe-niyang ni jili banjaha be safi, uthai faksidame sume hendume* ≪潘金蓮は呉月娘が怒ったのを知って、すぐうまいこといいわけして申しますには≫ (XVIII-11a), *U, Yuwei juwe gurun -i kimun be suki seci, abka na mohotolo inu ja de nakarakū* ≪呉, 越両国が讐をはらそうとしても、天地の窮まるまでも容易には止まない≫ (VI-8a), *ushacun be suki sembi* ≪お怨みをとりのぞこうといっています≫ (XXI-24a), *fucihi šajin de bahafi sui subure ofi, akū oho niyalma donjiha de fayangga inu akambi* ≪仏法により厄払いができることになって、亡くなった人がきいたら魂もまた嘆くことでしょう≫(VIII-22a).

212. 形式 [A(be)] *hala-* には「[(Aを)機能を同じくする同類の別のものに] とりかえる」(註8.) という意義素が仮定できるから, [A(be)] *hala (-me etu)-* という連結に対してはAが衣類の場合には「(衣類をぬいで) 同類の別の (衣類) にとりかえる (きかえる, はきかえる, つけかえる)」という翻訳が可能である: *etuku halame etufi* ≪着物を着がえて≫ (I-22b, XXIV-8a, etc.), *Si-men-king teike amargi taktu de etuku halame genehebi* ≪西門慶は今し方後の楼に着物をかえに行ってしまいました≫ (IX-19b), *geli etuku halabufi, buda jeku ulebuhe*

《又着物をかえさせて食事をさせました》(XXV-6b), *etuku gúlha be halafi* 《着物や長靴をかえて》(IX-7a), *giyaban gúlha be sufi, wase halafi, sabu etufi* 《長皮靴をぬいで靴下をかえて鞋をはいて》(II-5b).

cf. *Li-ping-el -i gajiha jui Tiyan-fu -i gebu be, Kin-tung seme halaha* 《李瓶児がつれてきた小者の天福の名を琴童と改めた》(XX-26b); *húlara de mangga seme uthai gebu be Húliyan seme halahan(sic!)* 《呼びにくいとすぐに名を蕙蓮と改めた》(XXII-3a), *fi gaifi wen-su bithe de bisire, Si-men-king ni gebu be Giya-liyan seme halame arafi* 《筆をとって文書にある西門慶の名を賈廉とかきかえて》(XVIII-6b), *fi jafafi U-sung ni jabun be halame dasafi* 《筆をとって武松の口供書を改修して》(X-8a), *gúnin be halarakú oci acambihe kai* 《気持をかえないでいるべきだったのだ》(XXI-23a), *si mujilen halafi* 《お前は心を改めて》(XII-21a), *sini beye de ulin bi, eigen halara de ja sembi wakao* 《お前さんの身には財産がある、且那をとりかえるなんてことは易々たるものじゃないか》(XIX-33a), *niyaman -i baita inenggi halaha* 《縁組は日取りがかわった》(XVIII-8a), *jalan halame eigen sargan okini*

---

註8. 口語では /haləmə/: /utukuvə haləmə; uncu utukudə haləmə; fatəN haləmə; tašəmə haləmə/ 《着物を着がえる; 別の着物に着がえる; 鞋底をかえる; あやまりを改める》。

*hala-* (/haləmə/) の場合には「同類の別のものに」ということが暗示(或いは明示)されているといえる。

又、本体を全く異形異質のものに変化されるのは *kūbuli-bu-* であり、属性の一部を改変するのは *guwaliya-bu-* である (cf. 口語 /qovəli- /, /guali-/)。

又、日本語では同じく「とりかえる」であるが「(自己の所有する) A と (他人の所有する) B とをとりかえる (交換する)」(A と B とが同類のものであるか、異質異形のものであるかは問題とならない。従って connotation の悪い場合は「すりかえる」と訳しうる。) という場合には *hūlasa-* が現れる:

*si aha -i sargan de latuci, aha inu hūlhame sini sula hehe de latume ishunde hūlasame hūlhambi* 《あんたが下僕のかみさんに密通すれば、下僕の方もこっそりあんたのお妾さんに通じお互にとりかえっこして盗んでるんですよ》(XXV-16a), *mini ere ergen be šelefi, erei baru hūlasaha seme inu koro akū* 《私のこの生命を捨てて、この人に対してとりかえたってうらみはありません》(XXIV-22a), *Si-men-king dengjan -i fejile, neifi tuwaci, dolo damu emu boose menggun bi, gūwa gemu tarcan toholon -i šoge, Si-men-king ambula jili banjifi fonjime, mini menggun be hūlasame gaifi absi unggihe, hūdun yargiyan be ala. Lai-wang songgome alame, ..., buya niyalma ai gelhun akū eitereme menggun be hūlasambi sini ninggun boose menggun be, bi bargiyame gaifi, da fempi be umai acinggiyahakū, baibi adarame hūlasame mutembi* 《西門慶は燈火の下であけてみると、中にはただ一包の銀子があるだけ、他は皆錫や鉛の円塊です、西門慶は大へん腹を立てて問いますには「俺の銀をすりかえてとってどこへやった、はやいとこ本当のことをいえ」来旺が泣きながら告げますには、「.....、私めが何で敢えて欺いて銀をすりかえるなんてことがありましよう。あなた様の6包の銀は私が取めとってもとの封をいささかも動かしてはおりません、妄りにどうしてすりかえることができましよう」》(XXVI-7a/8a), *sain nure tebufi ishunde hūntahan hūlasame* 《良酒について互に盃をとりかわし》(VI-13a), *hūntahan tuweleme coman hūlasame emu jergi omicaha manggi* 《盃を次々にとり廻し大酒盃をとりかわしーしきり飲みあった後》(XIX-5a) cf. 口語 /hūlasəmə/: /utukuvə beləi (, beləde) hūlasəmə ciāmə; erəvə terəi (, terəde) hūlasəmə ciāmə/ 《着物を米と交換する; これをあれととりかえる》

《幾世かわって夫婦となりますように》(XX-22b), geli juleri taktu de *halame sarilame* 《又表の楼で席を改めて宴をひらき》(XV-3b), *cargi boode niyalma akû, si urunakû niyalma de afabufi tuwakiyabu. Tiyān-fu be halame gajifi boode takûrsaki* 《あっちの家には人がいません, あなた必ずだれか人にいいつけて番をさせて下さい。天福をかわりにつれて来て家で使うことにしましょう》(XX-8b).

22. 衣服の袖をまきあげたり, 裾をからげたりする動作に対しては, 「(たれ下ったもの, 平たく拡がったものを, 端からくるくる) 巻き上げる, 巻き収める」という意義素の仮定できる *hete-* が充当される(註9): *Pan-gin-liyan jortai šanggiyan lingse -i camci -i ulhi be hetefi, ini giltasikû wahan be tuwabume, niyengniyeri elu -i gese juwan simhun be tucibuhe* 《番金蓮は故意に白綾子の下着の袖をまくりあげて彼女の金らんの袖口をみせて, 春の葱の様な10本の指を出しました》(XV-7b), *hûshian be hetefi* 《裙子をまくって》(→131. の例), *tuwaci U-da tulergi ci etuku heteme amba okson -i dosime jimbi* 《みると, 武大が外から着物をまくりあげて大股で入って参ります》(V-6b), *morin -i deleri etuku hetefi* 《馬上で着物をまくって》(→14. の例), *etuku hetefi deyere gese sujume taktu ninggude tafafi* 《着物をまくりあげて飛ぶように足早に楼上に登って》(IX-18b), *uthai etuku be hetefi, muke emu hunio tebufi mabu gaifi* 《すぐ着物をまくりあげて, 水を一桶入れて雑巾をとって》(V-15b), *Li-ping-el boode dosire de, duin gise hehe, terei gala de ulin bisire be safi, gemu acabume haldabašame uttu oci eniye tuttu oci eniye seme hûlame, terei funde ilha be tunggiyeme, etuku be heteme alimbaharakû sihešemi* 《李瓶児が部屋に入ると四人の妓女は, 彼女の手に財産のあるのを知って, 皆意にかなうようにお追従をいいこれなら奥様, それなら奥様, と口々にいい, 彼女の代りに花簪をひろったり着物をたたんだり, たまらない程ちやほやおもねります》(XX-23 b), *mimbe erdeken -i gama, bi cihangga sinde sishe sekte me, jibehun hetemi seme hendumbime, yasai muke aga agara adali eyebumbi* 《私を早めに娶ってつれてって下さいな, 私は喜んであなたのために敷ぶとんを敷き, かけぶとんをたたみますといいながら涙を雨が降るように流します》(XVI-13a), *mini bocihe ehe be hatarakû oci guwan-zin de sishe sektefun, jibehun heteme, geren niyangz -iemgi eyun non ojoro be buyemi* 《私の醜悪なのがお嫌でなければ官人のために敷ぶとん, 敷もの, かけぶとんをたたみ, 大勢の奥様方の姉妹になるのをこいこがれております》(XVI-3a), *sinde gidarakû, tere inenggi tere hehe hida hetere de*

註9. 折りたたんで形を縮小するのは: *bukda-* である: *arame wajifi, duin durbejen -i hošotolome bukdamé uhufi fempilefi* 《書き終って, 四角に角をだして折りたたみつつんで封をして》(VIII-7b). *bukdari* 《上奏文》はこの *bukda-* に名詞語幹形成語尾 *-ri* の接尾したものである。又, 片膝で跪坐するのを *bethe bukda-* (XIX-7b, XXI-5a, XXII-12a, etc.) という。なお衣類, ふとんなどをおさめるとき, 下例には仮りに《たたむ》と訳したが, *hete-* で示されるのは端から巻いて行く行動であって, 日本語の「たたむ」とは異なる。

emgeri sabuha ci ebsi mini fayangga be gamaha adali, inenggi dobori akû tere be waliyame muterakû ≪あなたにはかくさずにいうが、あの日あの女が簾をまき上げるときに一度眼に入ってからこの方私の魂を取って行ったように昼となく夜となくあの人のことを(忘れ)棄てることができず≫(II-31b), *hida be hetefi dosifi* ≪簾をまき収めて中に入って≫(XIV-23b), *tuwaci juwe hehei uju de, menggun sirgei araha di-gi etufi, duin soşon be acabume hetehebi* ≪みると二人の女が頭に銀糸でこしらえた鬢髻をつけて四つのまげをあわせてまき上げています≫(XI-3a).

23. その他、上掲の口語の /mulutulumə/(: /seməkəmə mulutulumə; garəhəvə mulutulumə/ ≪腕環をぬく; 鎖をぬく≫) や /mulutujumə/ (:/vasə mulutujumə; haitəhə honin mulutujumə/ ≪靴下がぬげる; 結えておいた羊がぬけた≫)に該当する *multule-*, *multuje-* はそれぞれ口語と同様に「(はめたものを)ぬく」, 「(はめたものが)ぬける, ぬげる」という意義素を仮定しうると思うが、未だ裏づけとなる例が充分ではない: *Si-men-king hendume, ere aha kemuni faksidambi kai. hasa etuku be kokolifi undeheh jafafi tanta sere jakade juwe ilan niyalma ibefi etuku adu be kokolifi fakûri be multulefi tuwaci beye -i hanci şanggiyan fangse gahari etuhebi* ≪西門慶が申しますには「こいつはいつも巧いこといいのがれるんだ。すぐに着物を剃ぎとって割竹をもって打て」といいましたので、2,3人の者が進み出て衣類を剃ぎとり褲子をひきぬがしてみると地肌に白絹の下着をつけています≫ *hüşihan be hetefi, fulgiyan fakûri be multulefi* ≪褲子をまくって、紅い褲子をひきぬがして≫(XXVII-8a), *tule tucime jifi, fakûri be multulefi tehe de* ≪手洗にやって来て裙子をずり下ろして坐ったときに(→I. 人体篇 §32.); *antaha dosinjire be sabuci, wase multujeme aisin -i sifikû tuheme, mang-gaşame girume sujumbi* ≪客が入って来るのが眼に入ると靴下がぬげ金の簪がおち、はにかみはじらい小走りに走る≫(XXV-1a).

上例中にみえる形式 *kokoli-* は≪(着用している衣服を)はぎとる≫と訳しうるが例が不足で、未だ次の一例しか見出していない形式 *sibşala-* とともに、文脈による臨時的意味しか知ることができない: *hehe -i fakûri be sibşalafi* (XXV-15a).

附記: 本稿は「I. 人体篇」の場合、及び今後の続篇の場合と同様に、満洲語文語辞典作製の将来に備えた基礎作業の一部であるが、1960年4月に本学1960年度紀要論文としてまとめたものを数ヶ所補訂した上、本1961年度紀要の組版に便利なように書き改めた(1961.1.10)。

特定の文献を資料とする記述的語彙研究をめざしているものであるが、その材料の採集・整理の作業は、本稿・続篇ともに現在まで、いずれも本学園短期大学卒業の次の方々の協力に負うところ大であった。勝沼(高野)八代子さん(1953-55年)と木村(河野)益子さん(1955-57年)のお二人には巻I-Xまでを、本学文科助手石塚千恵子さん(1957年以降)には巻XI-XXXIX(但し、本稿は既述の如くXXVIII巻までを資料として用いた)を現在までに手伝っていただいた。この際その旨を記して厚く御礼を申上る(1962.2.13)。

(昭和29-33年度文部省科学研究費(各個研究)による研究の成果の一部を含む)